大鳳寺跡第３次発掘調査概報

（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第２集）

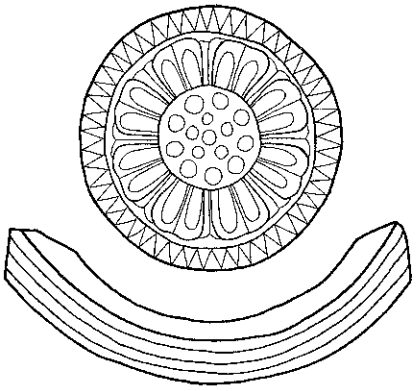
１９８３

宇治市教育委員会

正　誤　表			
ページ	行	誤	正
例　言	21	上原和人	上原真人
図　版	5	NOH2	NHO2

大鳳寺跡第３次発掘調査概報

（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第２集）



川原寺式軒瓦

１９８３

宇治市教育委員会

序

周知の遺跡大鳳寺跡は，昭和46年に宇治市史編纂委員会により第一次発掘調査が行われ，それにより検出された瓦積基壇と軒丸瓦により白鳳時代創建の本格的古代寺院として本市では広野廃寺とならび非常に重要な遺跡としての位置付けをされており，京都府遺跡地図にも記載されているものであります。

当遺跡はその後の宇治高等学校第二グラウンド拡張工事に伴う第二次発掘調査を実施したのに続き，今回，国・府より昭和57年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受け第三次発掘調査として実施したものであります。

今回の調査では中心堂宇の確認はできなかったものの寺院関連遺構の検出により寺院規模の類推と今後の調査に大きな手がかりを得ることができ，今後引きつづき解明に努めたいと考えております。

最後になりましたが調査にあたり種々ご指導ご協力いただきました関係各位に心から御礼申し上げます。

昭和58年3月1日

宇治市教育委員会

教育長　岩　本　昭　造

例　　言

1. 本書は，宇治市菟道西中に所在する大鳳寺跡の第３次発掘調査概報である。
2. 本調査は，昭和57年度国宝重要文化財等保存整備費による補助金を国・府より受け実施したものである。
3. 発掘調査は，昭和57年８月11日より９月18日まで実施した。
4. 発掘調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者　宇治市教育委員会

調査責任者　宇治市教育委員会　教育長　岩本昭造

調査指導者　近畿大学教授　杉山信三

京都府立城南高等学校教諭　山田良三

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官　西村　康

京都府教育委員会文化財保護課記念物係長　中谷雅治

調査担当者　宇治市教育委員会　文化財調査員　杉本　宏

調査事務局　宇治市教育委員会　社会教育課課長　小林　巧

同　文化係長　伊藤忠正

同　社会教育主事　吉水利明

同　主事　長谷川暁子

調査補助員　松岡宏高・村川俊明・義則敏彦・谷浦健史・牧野秀哉・安藤　剛・道之前好隆・横田　明・米浪哲也・山本リサ子・打本尚子・中村　恵・田口直美（龍谷大学学生）

杉本　旭（京都外国語大学学生）

調査協力者　木村捷三郎（京都市埋蔵文化財研究所），山本忠尚・上原和人（奈良国立文化財研究所），平良泰久・奥村清一郎（京都府教育委員会文化財保護課），五十川伸矢（京都大学埋蔵文化財センター），星野猷二（伏見城研究会），粟野　謨（田辺中学校），常盤井智行（龍谷大学大学院），㈱関西義組

5. 発掘調査を実施するにあたっては，土地所有者久保見勇氏の誠意ある御協力を得た。

6. 本書で使用した航空写真は，国際航業株式会社の撮影による。

7. 本書で使用する「N」は，注記しないかぎり磁北である。

8. 大鳳寺跡の発掘調査は当調査以前に，下記の２件が実施されているため，当調査を第３次発掘調査とする。

次	調査主体	調査年月	担当者
第１次	宇治市史編纂委員会	昭和46年	山田良三
第２次	大鳳寺遺跡発掘調査会	昭和54年	岩城　徹

9. 本書の執筆・編集は杉本が行い，橋本稔（立命館大学学生）の協力を得た。

目　　次

序

例　　言

Ⅰ．位 置 と 環 境…… 1

Ⅱ．発掘調査の概要…… 3

Ⅲ．検出遺構の概要…… 7

Ⅳ．出土遺物の概要……10

　　1．瓦　　類……10

　　2．土 器 類……16

Ⅴ．ま　と　め……19

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺の主要遺跡分布図
第２図　表採文字瓦拓影…… 1
第３図　調査地位置図…… 4
第４図　トレンチ配置図…… 5
第５図　北壁土層図…… 6
第６図　遺構平面図…… 8
第７図　出土軒瓦実測図(1)……11
第８図　出土軒瓦実測図(2)……12
第９図　出土土器実測図……17
第10図　調査地周辺道路概略図……19

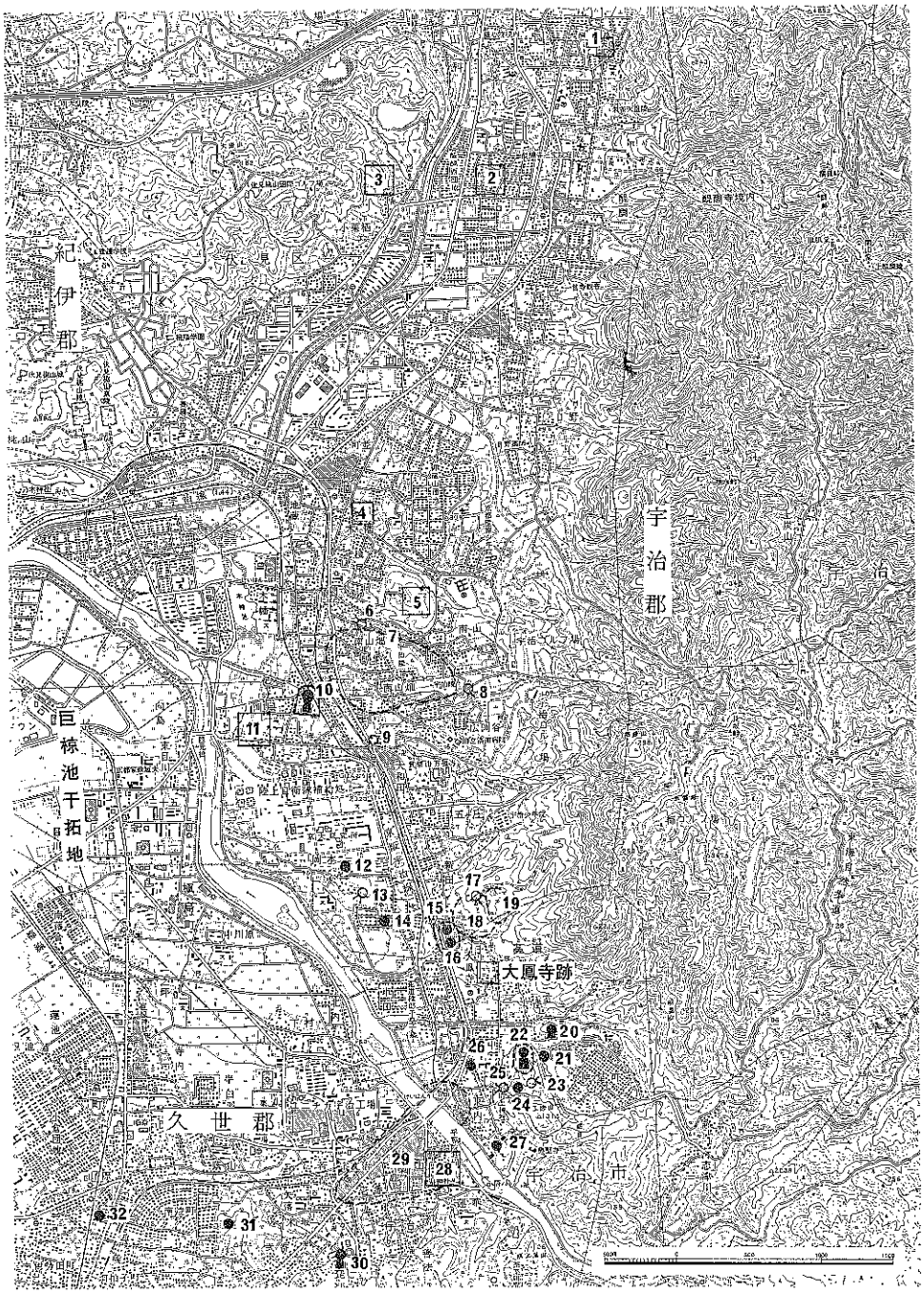
付　表　目　次

第１表　出土軒瓦集計表……13
第２表　出土軒瓦編年表……14
第３表　出土平城宮式軒瓦分有関係表……15

図　版　目　次

図版第１　調査地付近航空写真
図版第２　(1)調査地遠景（西から）
　　(2)調査地全景（北から）
図版第３　(1)ＳＤ01上面検出状況（北から）
　　(2)ＳＤ01完掘状況（北から）
図版第４　(1)調査地南半部柱穴群（北から）
　　(2)ＳＫ29（南から）
図版第５　軒丸瓦・軒平瓦

大鳳寺跡第 3 次発掘調査概報



第1図　調査地周辺の主要遺跡分布図

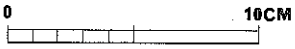
1：小野廃寺，2：醍醐廃寺，3：法琳寺跡，4：浄妙寺跡，5：松殿跡，6：北山畑瓦窯跡，7：木幡古墳群（宇治陵墓群），8：南山瓦窯跡，9：芝ノ東窯跡，10：宇治二子塚古墳，11：宇治郡衙推定地，12：瓦塚古墳，13：岡本瓦窯跡，14：一里塚古墳，15：西隼上り遺跡，16：隼上り古墳群，17：隼上り瓦窯跡，18：隼上り遺跡，19：羽戸山遺跡，20：池山古墳，21：妙見古墳，22：宇治二子山古墳群，23：宇治瓦窯跡，24：山本古墳，25：山本窯跡，26：狐塚古墳，27：恵心院山門前遺跡，28：平等院，29：宇治市街遺跡，30：丸山古墳，31：御廟古墓，32：石のカラト古墳。

Ⅰ. 位置と環境

大鳳寺跡は，宇治川東岸，宇治市菟道西中に所在する奈良前期創建の寺跡である。当地付近の地形は，東方にそびえる五雲峰（347m）から明星山（233m）に連なる山塊より流れ出る大鳳寺川と菟道大谷川とが形成した小扇状地形であり，標高29～30mを測る。

当該地付近は通称「大鳳寺」と呼ばれており，また，明治８年（1875）に隣接する三室村と合併し菟道村となるまで存在していた大鳳寺村の旧集落内でもある。この大鳳寺という地名がいつの時代より呼称されたかは明確でないが，平安時代に「自性院大鳳寺同院管領」（『仁和寺諸院家記』[注1]）とみえ，『東寺文書』の仁平二年（1152）三月日付「東寺御影供菓子支配状」の中にも「大鳳寺 綜十合[注2]」とみえることから，この時代には「大鳳寺」と呼ばれる寺院が存在していたことが推測されるのであって，この寺院名が寺院廃絶後も当地の地名として現在に至るまで言い伝えられたものらしい。

このように，地名・文献から「大鳳寺」が当該地付近に予想され，かつ布目瓦が茶畑・道に散布していたこともあり，考古学的にも古代寺院の存在が推測されていた。この幻の寺院に始めて発掘調査のメスが加えられたのは，昭和46年，宇治市史編纂委員会によってであり（第１次発掘調査），茶の木をさけながらの限定された発掘ではあったが，一辺15m前後の瓦積基壇（推定塔跡）と川原寺式の軒丸瓦を検出したことにより，当遺跡が奈良前期（白鳳時代）創建の本格的古代寺院であることが確認され[注3]，宇治市内では，旧久世郡内の広野廃寺と伴に奈良前期の寺跡として注目をあびた[注4]。その後，昭和54年，宇治高等学校第２グラウンド拡張工事に伴い，一部が発掘調査されたものの（第２次発掘調査），多量の瓦が出土したのみで，明確な遺構は検出されなかった[注5]。



第２図　表採文字瓦拓影

当寺跡の周辺は各時代の遺跡が濃密に分布している。その概要を時代順に記せば，北方約400ｍの丘陵上に，弥生時代後期の高地性集落である羽戸山遺跡[注6]，その西隣りの台地上に弥生時代中期頃と考えられる西隼上り遺跡が存在する。古墳時代では，中期の大型方墳

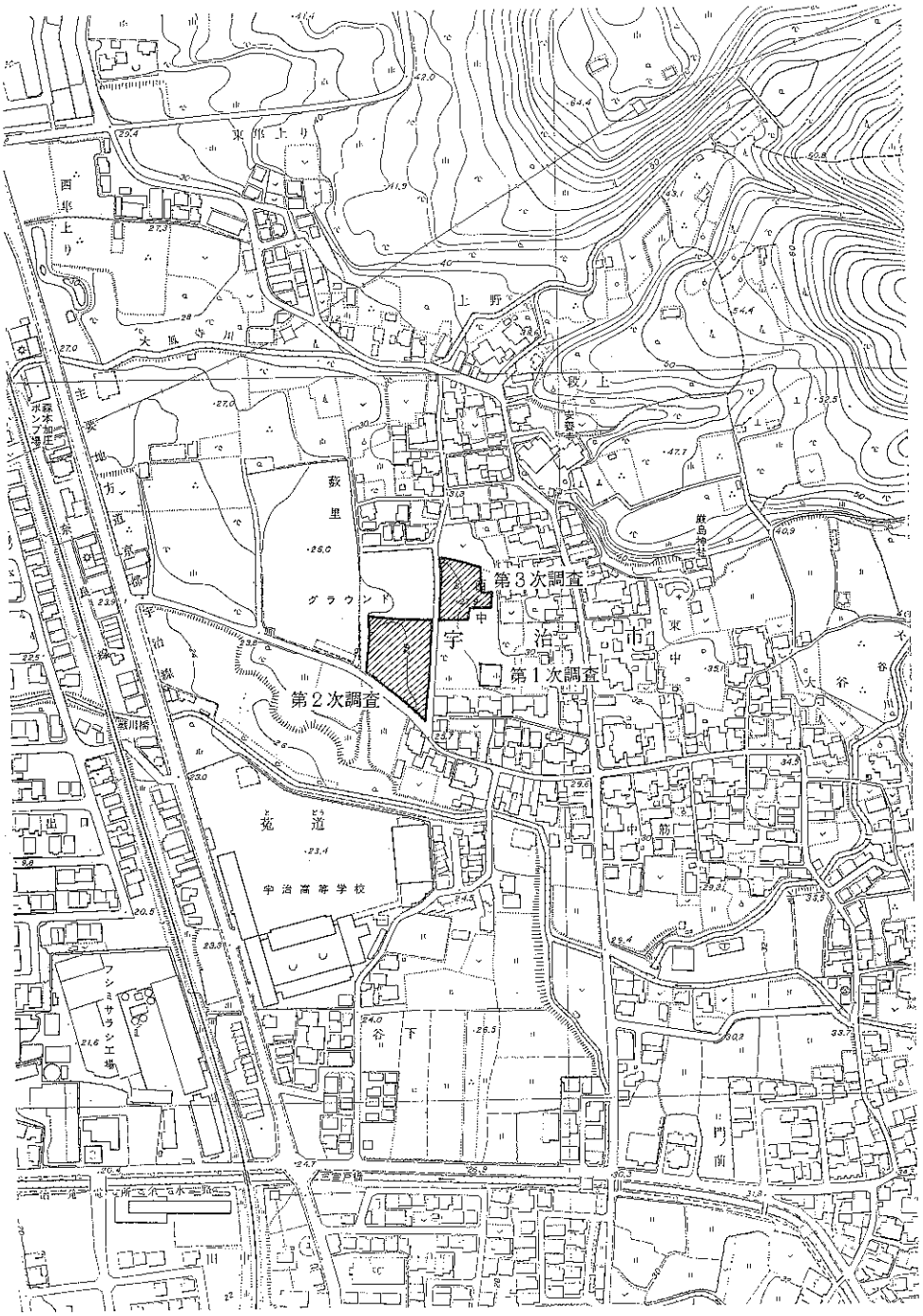
・円墳であり，武器・武具等豊富な副葬品を出土した宇治二子山南・北墳[注7]が宇治橋東側の丘陵上に立地し，その対岸丘陵上に前方後円墳かと考えられる池山古墳をはじめ数基の小型円墳が散在している。飛鳥時代には，大和豊浦寺の創建瓦を焼いた隼上り瓦窯[注8]が前述の羽戸山遺跡の北方丘陵南斜面に，大鳳寺跡の創建瓦を焼いた宇治瓦窯[注9]が二子山古墳群の南隣りに存在している。このように一貫して主要遺跡が当寺跡周辺に営み続けられるのは，当該地域が国郡制の制定に際して宇治郡宇治郷の編入に象徴されるように，その中枢部的地域であったことを現わしているといえよう。また，付近には西国十番札所三室戸寺，平安時代の石造線刻の蜻蛉石等，古刹・名勝も多く，町並も古いたたずまいを今に良く伝えている地域である。

Ⅱ．発掘調査の概要

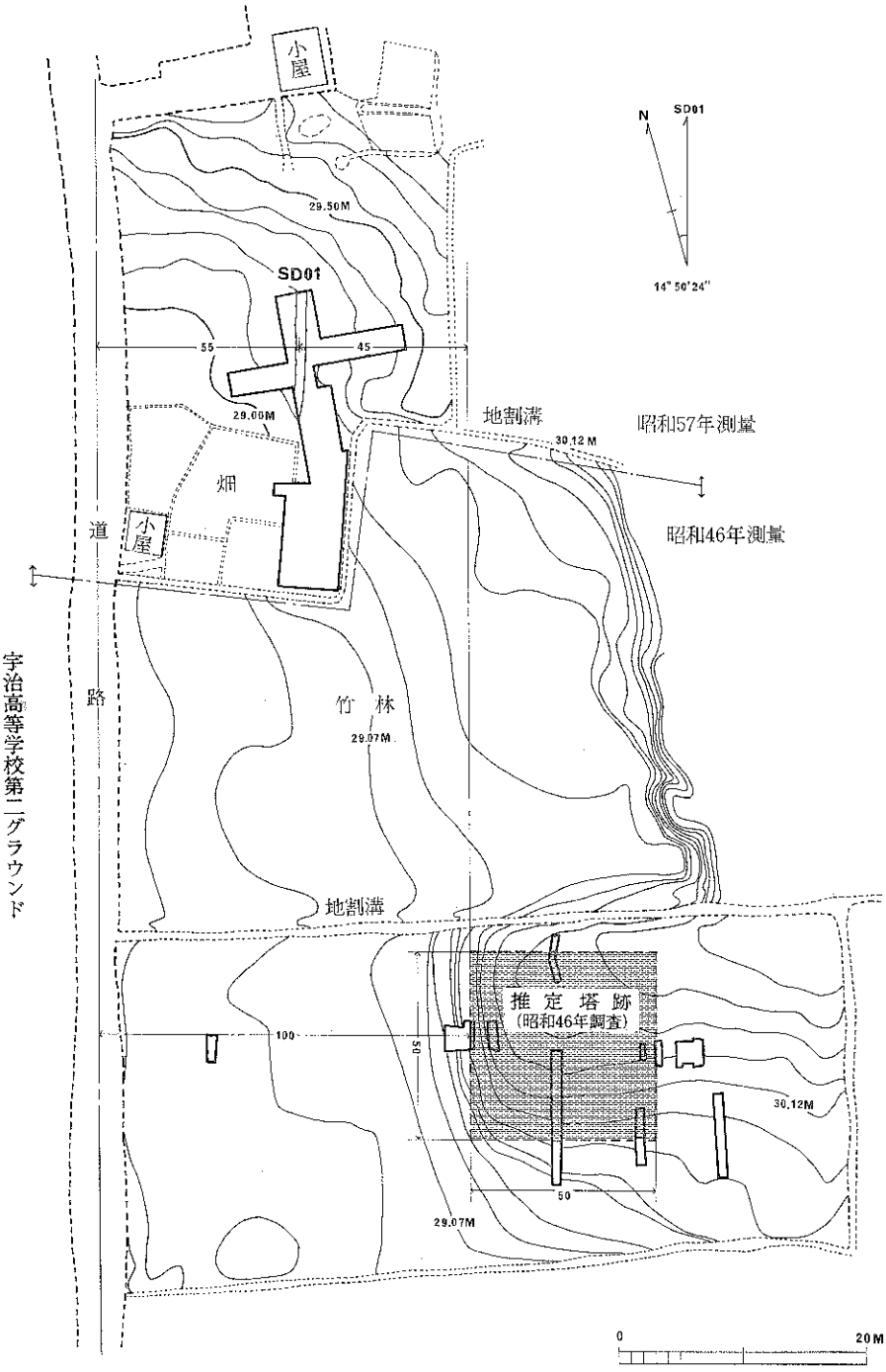
今回の調査地は，昭和46年調査の推定塔跡の北方約40m地点であり，現状は栗畑及び畑地である。トレンチは，栗木や畑地をさけながら，南北24m・東西18m・トレンチ幅３ｍを基本として設定した。

掘削は人力を基本とし，一部トレンチ拡張時において小型パワーショベルを使用した。

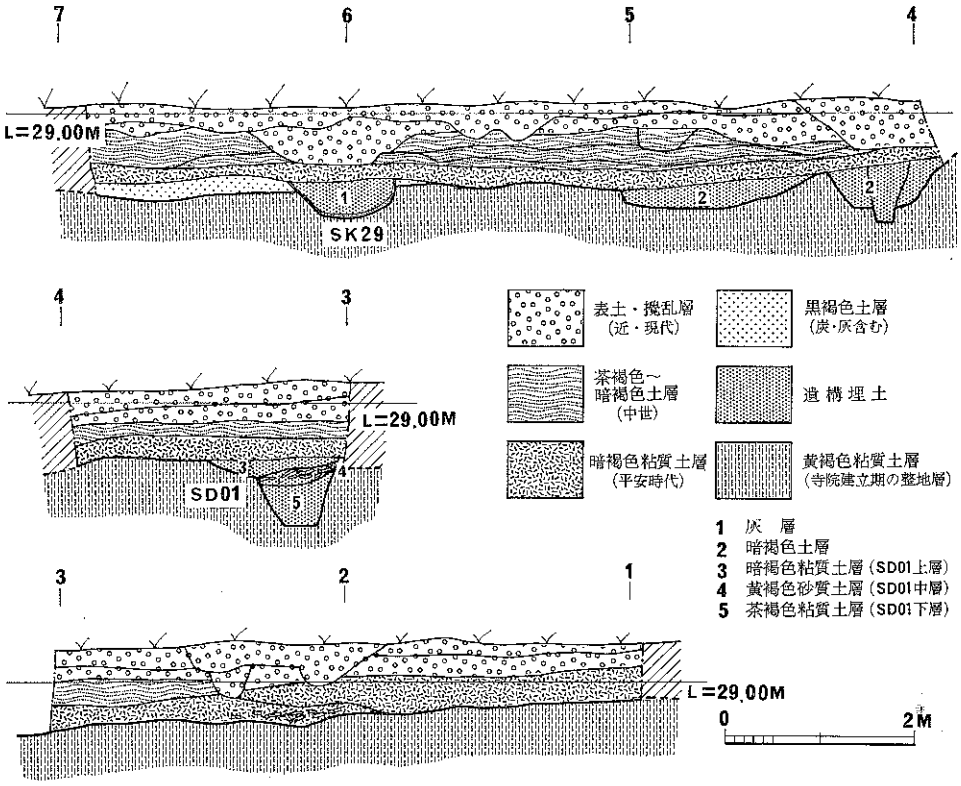
８月11日より現状測量と並行しながら掘削を開始した。20cm程の表土層を除去後，黄褐色土層が２～４ｂｃ区において一面に検出できたが，その層中に含まれる遺物より近世整地層であることが判明した。この層は調査地北半部にしか認められず，南半部は寺院建立期の整地層直上まで近世攪乱層が及んでいた。北半部の近世整地層下には茶褐色～暗褐色土層が10～40cm程の厚さをもって堆積していた。当層も整地層と考えられ，瓦・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦器等の破片が出土しているところより，中世に形成されたものと考えられる。この下層に暗褐色粘質土が多量の瓦を包含し形成されている。土器類の出土が少なく時期比定が困難であるが，上層及びこの層下において検出できた遺構との関連より平安時代には形成されたものと考えられる。この下層は黄褐色粘質土をベースとした厚い整地層であり，層厚70cm以上を測る。ここにおいて初めて多量の瓦を包含した遺構群を検出したため，当層上面を寺院に伴う遺構面とし，上面において遺構の検出に努めることにした。検出した遺構の概要は後述するが，遺構面まで１ｍ以上もあり予想以上に深かったことや，栗木を保護するためトレンチ設定が限定された事等により，結果として広範囲な面的調査は不可能となり，限られた面積の中で最大限の調査を実施することとなった。９月11日の現地説明会終了後，今後の調査に備え基本杭を埋め込み，９月18日の埋め戻しをもってすべての現地調査を完了した。



第３図　調査地位置図（1：5000）



第4図　トレンチ配置図（昭和46・57年測量合成図）（数字＝尺　1尺＝0.3m）


7
6
5
4
L=29.00M
1
2
2
SK29
4
3
L=29.00M
SD01
4
5
3
2
1
L=29.00M
0
2M
表土・撹乱層
(近・現代)
黒褐色土層
(炭・灰含む)
茶褐色～
暗褐色土層
(中世)
遺構埋土
暗褐色粘質土層
(平安時代)
黄褐色粘質土層
(寺院建立期の整地層)
1 灰 層
2 暗褐色土層
3 暗褐色粘質土層(SD01上層)
4 黄褐色砂質土層(SD01中層)
5 茶褐色粘質土層(SD01下層)

第5図 北壁土層図

Ⅲ. 検出遺構の概要

今回の調査により検出した遺構には，溝・柵・掘立柱建物・土壙・焼土壙・柱穴等がある。ここでは特に記さない限り黄褐色粘質土（寺院建立期の整地層）上において検出されたものである。

ＳＤ01　トレンチ北半部中央，４ｂ～ｅ区で検出した溝。断面「⊔」状をなし，幅90cm前後，深さ70cm前後で，Ｎ14°50'24"Ｅの振れを示す。埋土は大きく３層に分層し得た。上層は，暗褐色粘質土であり，瓦小片を含む。中層は，黄褐色砂質土であり，多量の瓦を包含していた。しかし，その散布が密な部分は４ｂ・ｃ区のみに限られ，南半部は希薄であった。下層は，茶褐色粘質土であり，少量の土師器片を出土した。

ＳＢ22　５ｈ・ｉ区で検出した掘立柱建物。規模は２間×１間以上。柱間は210cmである。柱穴掘方は隅丸方形であり，柱径は15cm程である。近世か。

ＳＡ21　４ｈ・ｉ区で検出した柵列。２間分を確認。柱間は336cmと258cmである。柱径は15cm程である。近世か。

ＳＡ23　５ｈ・ｉ区で検出した柵列。ＳＡ21の西側190cm地点を平行してはしっている。２間分を確認。柱間は196cmと218cmであり，柱径は10cm程である。近世か。

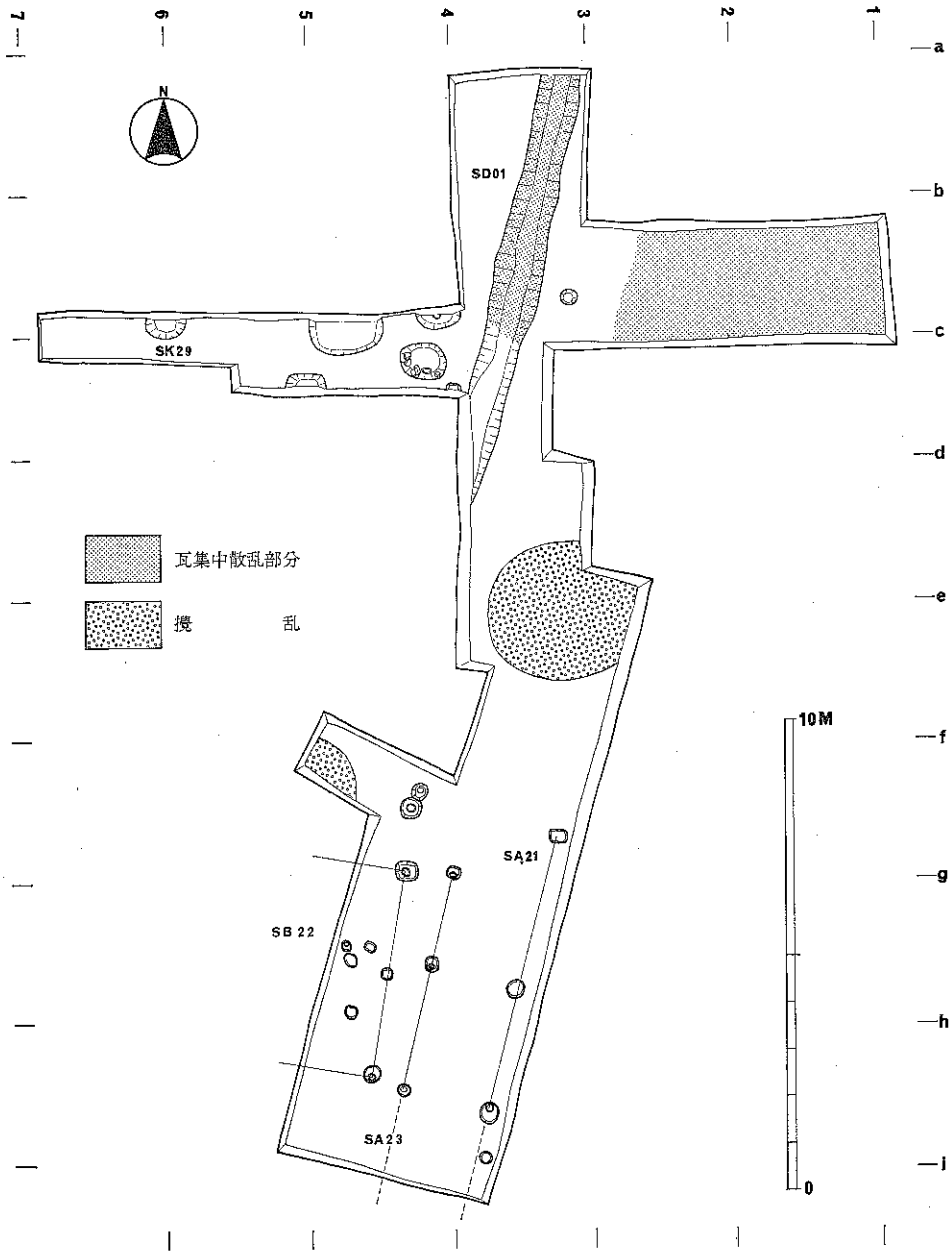
ＳＫ29　６ｃ区北壁断面寄りで検出した長さ80cm程の隅丸方形の土壙。暗褐色粘質土層と黄褐色粘質土層との間隙に形成された炭・灰を含む黒褐色土層をベースとしている。埋土は，灰層であり，その中に鉄滓片数個を含んでいた。壁面は全体的に厚さ３cm程に固く焼け締っており，所謂焼土壙と呼ばれるものである。小鍛治に伴うものであろうか。

以上の主要遺構の他に，２・３ｃ区において黄褐色粘質土層上面に多量の瓦が散乱していた。

小結　ＳＤ01について若干の説明を加え小結とする。

まず，ＳＤ01のＮ14°50'24"Ｅという方位は，第１次調査の瓦積基壇の方位とほぼ一致し，しかも溝中心線より基壇西辺まで約45尺[注10]である。同様にＳＤ01西側道路が同じ方位を示し，その間は約55尺を測る。したがって基壇西辺より道路中心線までは約100尺と算出される。

今回の限られた調査地内では，ＳＤ01の性格を特定することはでき得なかったものの，


7
6
5
4
3
2
1
a
b
c
d
e
f
g
h
i
N
SD01
SK29
瓦集中散乱部分
攪　　乱
SA21
SB 22
SA23
10M
0

第6図　遺構平面図

上記した瓦積基壇との関係は，この溝が寺院に関わる遺構であることを示すと推察され，今後の調査の中でその性格を明らかにしてゆきたいと考える。また，ＳＤ01西側道路については，古い地割が現代に引き継がれて来た可能性を示し，道路とグラウンド面において現状でも２m近い落差が認められることは，寺域西限を示す地割であったことを予測できよう。いずれにしても周辺の綿密な測量調査の必要性を痛感する。

Ⅳ．出土遺物の概要

1．瓦　　類

今回の発掘調査で出土した遺物の大半は瓦類であり，コンテナ200箱分に及ぶ。その中でも通常の丸瓦・平瓦が99％以上であり，軒丸・軒平瓦は計40個体分しかない。本概報においては，丸・平瓦の整理・分類が未了であるため一切割愛することとし，軒瓦についてのみ報告する。

軒丸瓦（第７図・第８図）　６型式25個体を得た。

NM01　複弁８弁蓮華文軒丸瓦。弁端が反る複弁蓮華文を内区主文とする。中房はやや突出し，外周に圏線をめぐらす。蓮子は１＋５＋９で，蓮子周囲にわずかながら圏線痕跡を認め得る。外縁は面違鋸歯文で飾る。川原寺式を忠実に模した個体ではあるが，全体的に躍動感がなく，面違鋸歯文も雑な造りになっており，標式例よりやや後出的。塔跡でも出土。

NM02　単弁16弁蓮華文軒丸瓦。突出した子葉をもつ単弁16弁蓮華文を内区主文とする。蓮子は１＋６である。外区内縁には珠文をめぐらす。瓦当裏面・側面は粗いヘラケズリ調整。平城宮6133―Ｈと同笵。

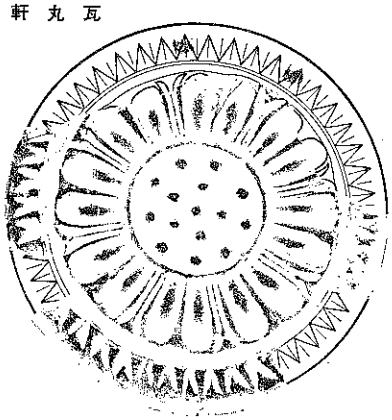
NM03　複弁８弁蓮華文軒丸瓦。弁中央部がややもり上る複弁８弁を内区主文とする。中房は欠失しているが，１＋８の蓮子を持つと考えられる。外区内縁は２重の圏線，外区外縁には陽刻鋸歯文をめぐらす。平城宮6225系。

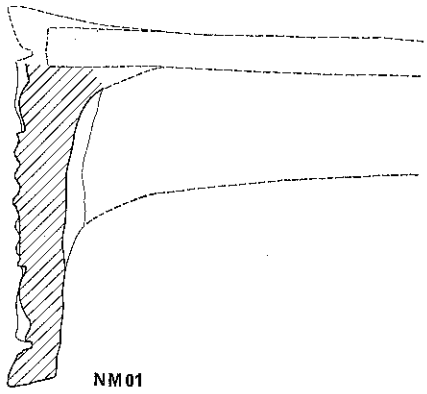
NM04　複弁８弁蓮華文軒丸瓦。小ぶりの複弁８弁蓮華文を内区主文とする。中房欠失。１＋６の蓮子をもつと考えられる。外区内縁は珠文，外区外縁には線鋸歯文をめぐらす。平城宮6282系。塔跡でも出土。

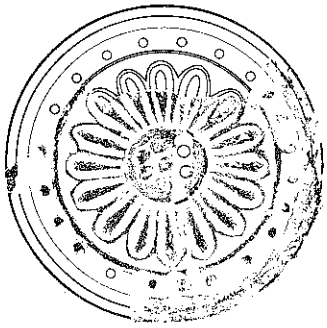
NM05　複弁蓮華文軒丸瓦。８弁と考えられる。弁端がやや反る複弁蓮華文を内区主文とする。外区内縁は珠文であるが，珠文を囲む内側圏線がやや波うつ特徴が認められる。外区外縁は直立縁である。中房に「大伴」の文字を有すものか。

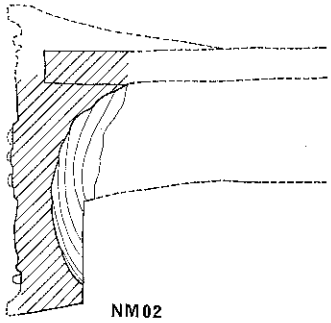
NM06　単弁12弁蓮華文軒丸瓦。平坦で先の尖り気味の単弁12弁蓮華文を内区主文とする。中房もほとんど突出せず平坦である。蓮子は１＋４である。外区内縁には珠文をめぐらすが，圏線は内側に一条のみで，しかも珠文３個を１単位として多角形状にめぐってい

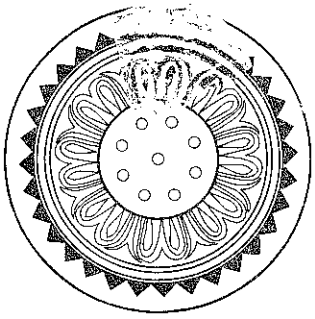
軒 丸 瓦

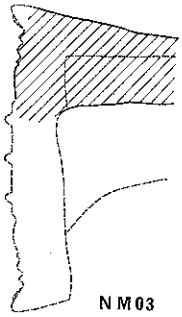


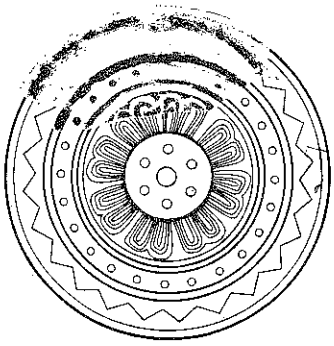


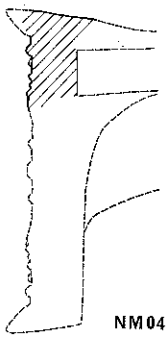






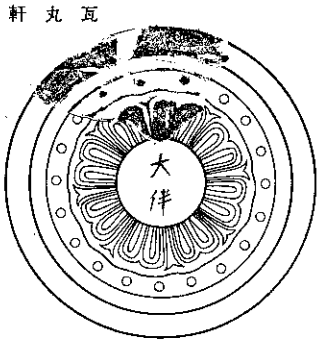


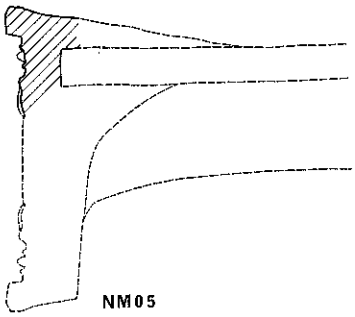


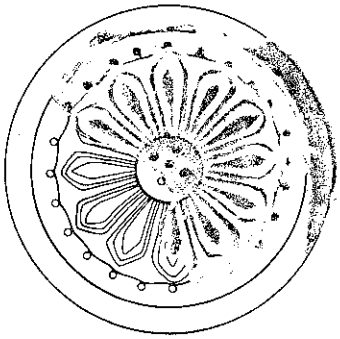


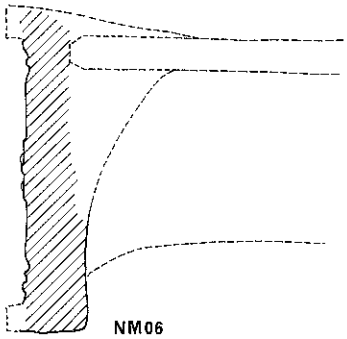
第7図　出土軒瓦実測図(1)

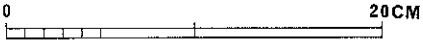
軒 丸 瓦



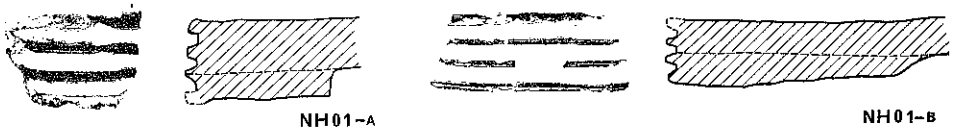


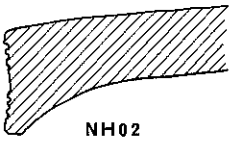






軒 平 瓦





第8図　出土軒瓦実測図(2)

軒丸瓦

型　式	時期	個体数	%	弁　数	蓮子数	外区内縁	外区外縁	備　　考
NM01	Ⅰ	19	76	F8	1+5+9		MV	川原寺式。推定塔跡でも出土。
NM02	Ⅱ	2	8	T16	1+6	S	SS	平城宮6133—H。
NM03	Ⅱ	1	4	F(8)	(1+8)	K2	(MY)	平城宮6225系。 平城宮6663系とセット。
NM04	Ⅱ	1	4	F(8)	(1+6)	S	MS	平城宮6282系か。
NM05	Ⅲ	1	4	F		S	SS	東寺・広隆寺出土例の中房に「大伴」の文字をもつものか。
NM06	Ⅲ	1	4	T(12)	1+4	S	SS	出土例不明。
		25	100					

軒平瓦

型　式	時期	個体数	%	内区文様	外区文様	顎の種類	備　　考
NH01 A	Ⅰ	13	86	G4		段顎(浅)	NM01とセット。
NH01 B	Ⅰ	1	7	G4		段顎(深)	NM01とセット。
NH02	Ⅱ	1	7	KK	K	曲線顎	平城宮6663—C。 平城宮6225系とセット。
		15	100				

記号　F：複弁，T：単弁，G：重弧文，KK：均整唐草文，S：珠文，K：圏界線，MV：面違鋸歯文，MS：線鋸歯文，MY：陽刻鋸歯文，SS：素縁，(数字)：推定

第1表　出土軒瓦集計表

る特徴をもつ。外区外縁は直立縁である。

軒平瓦（第8図）　2型式15個体を得た。

NH01　四重孤文軒平瓦。段顎。顎の長さにより2種に分類できる。顎長65～90㎜のもの，140㎜のものである。前者をA，後者をBとする。Bは1点のみ出土。

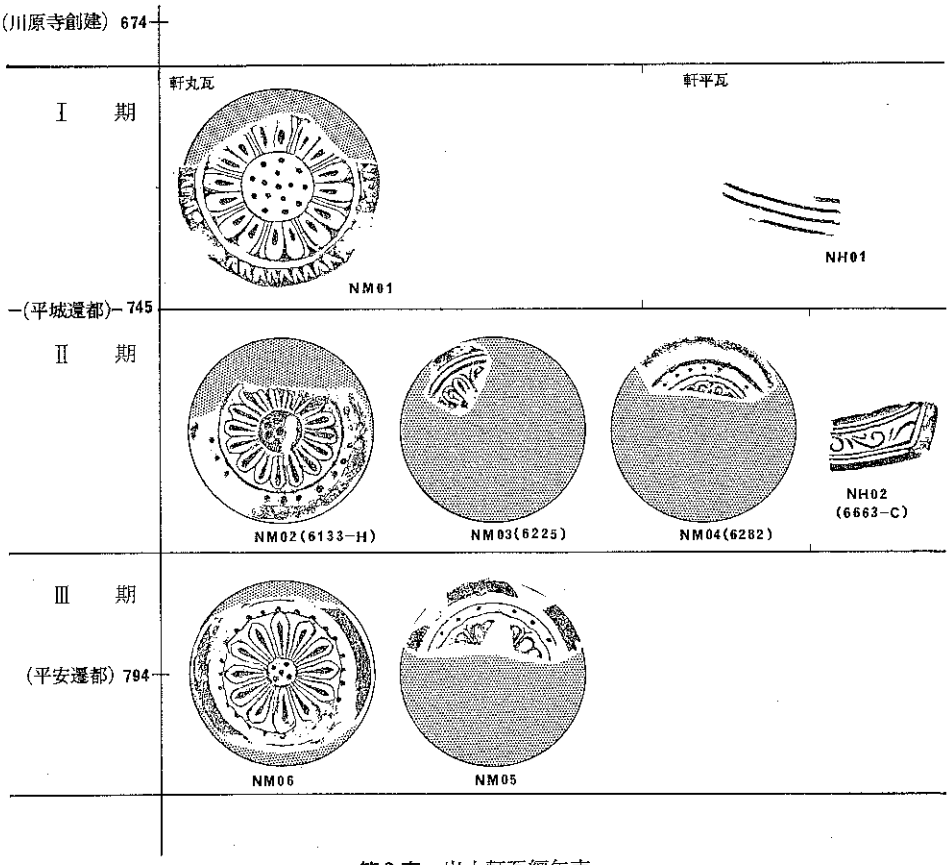
NH02　均整唐草文軒平瓦。中心飾の左右に各3回反転する唐草文を配すと考えられる。中心飾及び左側第1単位の大半を欠失しているが，中心飾は上方に開いた「C」字状の中心葉内に，杏葉形の花頭を垂飾しているものと思われる。右側の第3単位第1支葉を欠落するという特色がある。曲線顎。平城宮6663—Cと同笵。

小結　今回出土した軒瓦は大きく3期に分類できる。

Ⅰ期　NM01とNH01とが一対をなす所謂川原寺式のセットで構成されている。出土比はNM01が全軒丸瓦中76%，NH01が軒平瓦中93%と大半を占めている。平瓦においても格子叩きのものが縄叩きのものを同様に凌駕している。大鳳寺跡の創建瓦である。

宇治郡を含む南山城地方の広義の川原寺式の動向は，蓮子が2重にめぐる川原寺亜式のものが，正道廃寺[注11]・平川廃寺[注12]・高麗寺跡[注13]等に広く分布しており，蓮子が3重にめぐるものは，当寺跡の他，高麗寺跡・平川廃寺・普賢寺[注14]に散見できるものの，普賢寺例はその型式化が顕著であり，標式例に近いものは前2者のみである。このように，概して標式例に近いものは，南山城諸寺院の中でも少なく，当寺跡が創建瓦として川原寺式を忠実に模したものを使用していることは大きな特色といえる。

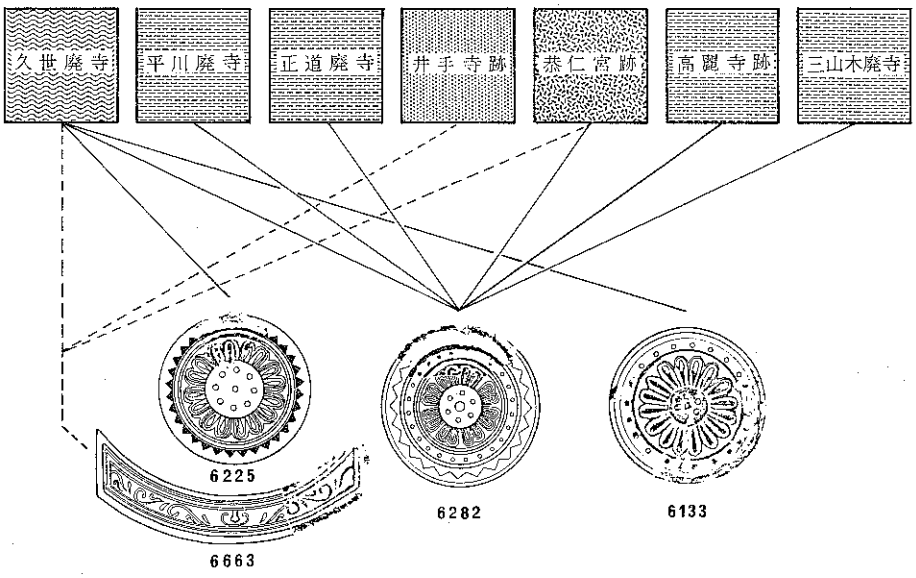
Ⅱ期　NM02・NM03・NM04・NH02の平城宮式軒瓦のみで構成されている。Ⅱ期の軒丸瓦は全軒丸瓦中16%，軒平瓦は7%を占める。NM02は平城宮6133—H，NM03は平城宮6225系，NM04は平城宮6282系，NH02は平城宮6663—Cに比定できる。平城宮6282



第2表　出土軒瓦編年表

系・同6133系はともに大膳式所用瓦であり，平城宮6225系と同6663—Cのセットは，第2次大極殿・朝堂院を代表する瓦である。以上の4種は，恭仁・紫香楽・難波を経て，天平十七年（745），平城還都後の造営時に使用されたものを主体とする所謂平城宮第Ⅲ期（天平十七～天平勝宝年間）に比定できるものである。[注15] 平城宮式軒瓦は南山城諸寺院に広く分布しており，この時期に各寺院とも中央と密接な関係を持ちながら改修を行なったらしい。しかし，その使用瓦は均一でなく一定の差異が認められる。平城宮6282系（NM04）は比較的広範囲に使用されており，恭仁宮跡[注16]・正道廃寺・平川廃寺・高麗寺跡・三山木廃寺[注17]・久世廃寺等[注18]に認められるのに対し，管見にふれた限りでは，平城宮6133系（NM02）は久世廃寺のみに，平城宮6225系（NM03）も久世廃寺のみに，平城宮6663系（NH02）は恭仁宮跡・久世廃寺・井手寺跡[注19]にしか認められなかった。しかも，平城宮6225系と平城宮6663系がセットで発見されたのは，当寺跡を除けば久世廃寺のみであり，平城宮式軒瓦の保有関係において類似した様相を呈していることは注意すべきである。

Ⅲ期　NM05とNM06のみであり，同期の軒平瓦は検出していない。ともに奈良時代後期末から平安時代初頭頃のものであり，全軒丸瓦中8％を占め，3期中最少の出土比である。当期においても若干の改修が行なわれたのであろう。NM05は，他に東寺・広隆寺等に散見できるといい，[注20] 仁平二年（1152）三月日付の「東寺御影供菓子支配状」の中に大鳳



大鳳寺跡出土平城宮式軒瓦

第3表　出土平城宮式軒瓦分有関係表

寺の名が見えることから，両寺院の間に何らかの関係が，平安時代初頭より存在し続けたことを示す物的資料といえる。NM06は，本例のみ赤褐色を呈す軟質の軒丸瓦であり，文様も地方色が濃い。旧宇治郡内には，飛鳥時代の隼上り瓦窯，奈良時代前期の宇治瓦窯以外に岡本瓦窯を始め，数ケ所の縄目叩きの平瓦を出土する瓦窯跡が存在することから，それら近隣瓦窯で生産された可能性もある。

以上，大雑把ではあるが各期の概要を記した。しかし，大鳳寺跡の発掘調査も始まったばかりであり，今後の資料増加により再検討をしなければならないことは言うまでもない。しかしながら，ここで知り得た事実は明らかに大鳳寺の創建とその展開の歴史的背景を如実に表わしていると考えられ，今後の調査に大きな期待が寄せられよう。

2. 土 器 類

今回出土した土器は大半が後世整地土層中のものが多く，遺構との関連で出土したものは少ない。また絶対数においてもコンテナ1箱程度しかなく，その遺存度も良好とはいえない。時代的には近世のものが圧倒的に多く，他は少量である。

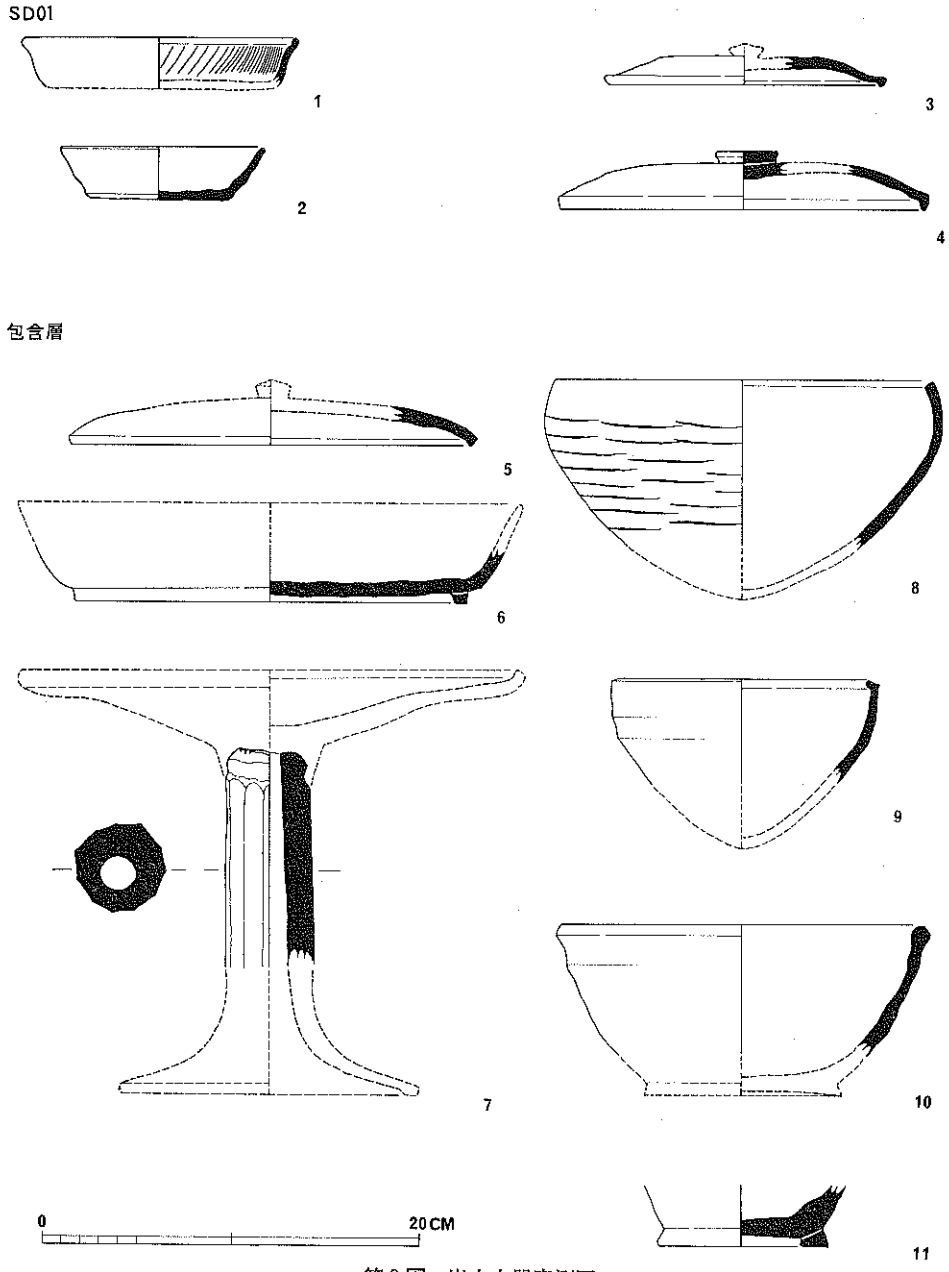
ＳＤ01出土土器（第９図）　ＳＤ01出土土器は極めて少なく，図化できるものは４点のみであった。ともに中層出土。（１）は土師器杯である。口縁端部をやや内側に巻き込み，体部内面に一段放射暗文を施す。外面調整不明。（２）は須恵器の杯である。口径11cm，器高３cmを測る。外底面は不調整である。（3・4）はともに須恵器の杯蓋である。（３）は口縁部が一度水平方向に屈曲した後，端部が垂下するもので，宝珠様のつまみが付くと思われる。（４）は口縁端部のみが垂下するもので，大ぶりの偏平なつまみが付く。図化できたもの以外に若干の土師器・須恵器片が出土しているが，状態は不良である。また，下層より出土した土師器杯小片の外面にヘラケズリ痕が認められた。

全体的に奈良時代的特色を良く留め，８世紀後半前後に比定できよう。

包含層出土土器（第９図）　遺構内出土土器以外すべて包含層として取り扱っておく。時代的には圧倒的に近世のものが多いが，今回はそれらを一切割愛する。

（5・6・8・9）は，２・３ｃ区の整地土上面瓦集積より出土した須恵器である。（５）は口径21cmを測る蓋で，皿に組み合うものであろう。（６）は口径26.5cm程になると思われる盤で，断面台形の高台を底部外面外周内側に貼付する。（８・９）はともに所謂鉄鉢であり，（８）は体部外面をヘラミガキする。（９）は（８）に比べ小型で，造りもやや雑である。ＳＤ01と同時期か。

（7・10・11）は，暗褐色粘質土層出土。（７）は土師器高杯の脚部であり，外面を11面



第9図　出土土器実測図

S D01，1～4　土師器（杯：1）
須恵器（杯：2，杯蓋：3，4）
包含層，5～11　土師器（高杯：7）
須恵器（盤：6，皿蓋：5，鉢：8・9・10，壺：11）

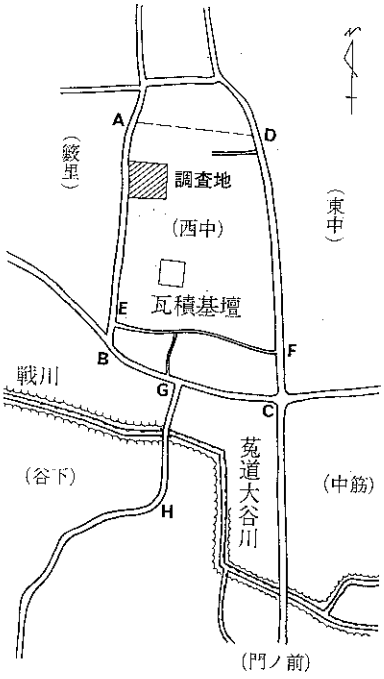
に面取りする。（10）は須恵器の鉢であり，口縁を玉縁状にするものの中では，玉縁の突出が退行しており型式的に後出要素を示す。（11）は須恵器の壺か瓶の底部片であるが，高台が底部最外周よりさらに外側へはみ出しており，型式的に新しい。（10）の形状を見る限り，平安京内膳町ＳＫ18出土例[注21]に類似しており，概ね11世紀前後に比定できる。

以上以外にも，東海系灰釉陶器・近江系緑釉陶器片等が少量認められた。

V. ま　と　め

以下，若干の問題点を整理し，本概報のまとめとしたい。

寺域　今回の調査において，寺院遺構に関わるＳＤ01を検出したことは，現地形より寺域を推定する有力な手掛りとなった。前述したごとく，宇治高等学校第２グラウンドと調査地との間を南北に走る道路（Ａ―Ｂ）が寺域西端ラインとして想定でき得るならば，それ以外の現有道路はどうなのであろうか。Ａ―Ｂライン東方の南北道路（Ｃ―Ｄ）は，Ａ―Ｂラインに比べ西偏しているが，Ｂ―Ｃ間の距離は約 110 m（１町）である。Ａ―Ｄラインには，現状において１ｍ前後の段差がある。Ａ―ＤラインとＢ―Ｃラインの距離は約１町半である。Ｅ―Ｆラインの西半部は，Ａ―Ｂラインとほぼ直角であり，Ｇ―Ｈラインの南北はＡ―Ｂラインとほぼ平行である。また，Ｈ地点南方に「門ノ前」という字名が残っており，このラインが南大門につながる道路であったかも知れない。



第10図　調査地周辺道路概略図
（1：5000）〔()＝字名〕

以上のような事例は，正確な数値をただちに提示できないものの，Ａ―Ｂ―Ｃ―Ｄに囲まれた範囲に，南北１町半，東西１町の寺域を現状の中から想定することもまた可能であって，各ラインが字境界と合致することも，現有道路が古い地割を踏襲していることを示すものであろう。

創建の時期　今回の調査で出土した軒丸瓦の８割近くがⅠ期の所産であり，しかも１型式のみであったことは大変興味深い。

当寺跡の川原寺式の軒丸瓦を詳細に観察すると，一見した限りにおいては認め得ない蓮子周囲の圏線が，わずかながらその痕跡を留めていることが確認でき，蓮子断面も半球形というより，円錐形に近いことが確認できる。このような細部文様の不明瞭さという現象

は，笵の摩滅によって成生した可能性を示しており，蓮子周囲の圏線を明瞭に識別できる平川廃寺出土例・高麗寺跡出土例に比べ，必ずしも型式的に後出的であるとは言えないのであって，相互の比較検討が必要である。

標式例を出土する大和川原寺がいつ創立されたかは議論のあるところであるが，仮りに，天武二年（674）[注22]には成立していたとすれば，この川原寺式の基本要素を忠実に踏襲する軒丸瓦を創建瓦とする大鳳寺跡は，674年よりさほど長い時間的経過をまたずして創建されたといえ，しかも今回のような周辺部分の調査においてもその大半が川原寺式（NM01・NH01）であったことは，短時間の内に付属施設までも整備されていたことを物語るものであろう。

いずれにしても，大鳳寺跡の発掘調査はやっとその途についたばかりであるが，今回の調査の結果，当該地が後世土地利用のたびに盛土によって整地が行われて来たために寺院に関わる遺構が良好な状態で保存されていることが判明し，壮大な古代寺院遺構が足下に眠っていることが予測されるにいたった。発掘調査の進展如何によってはその全貌を現代に甦らすことも可能であり，今後の発掘調査に期待したい。　　（杉本　宏）

〔注〕

注１　『群書類従』，補任部

注２　『平安遺文』，2758号

注３　山田良三「寺院の建立」（『宇治市史』第１巻，昭和48年）

注４　宇治橋東詰にある橋寺放生院が寺伝によれば，推古天皇12年，宇治橋架設とともに創建されたと伝える。

注５　「大鳳寺跡発掘調査会」により発掘調査。未報告。

注６　小山雅人「羽戸山遺跡」（『京都府埋蔵文化財情報』第３号，㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター，昭和57年）

注７　『宇治二子山古墳』（宇治市教育委員会，昭和43年）

注８　昭和57年宇治市教育委員会により発掘調査。近刊予定。

注９　柴田　実「宇治古代登窯遺趾」（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊，京都府教育委員会，昭和８年）

注10　ここで，約という不確定な表現をするのは，昭和46年の測量図と今年度の測量図とが統一的な基準ポイントを基とする測量でないことによる。

注11　高橋美久二・近藤義行「正道遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第１集，城陽市教育委員会，昭和48年）

注12　平良泰久・近藤義行・海老瀬敏正・辻本和美他「平川廃寺発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第２集，城陽市教育委員会，昭和49年）

注13　梅原末治「高麗寺跡の調査」（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第19冊，京都府教育委員会，昭和13年）

注14　鷹野一太郎「普賢寺跡」（『田辺町遺跡分布調査概報』，田辺町教育委員会，昭和57年）

注15　奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ』瓦編２解説（昭和50年）
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅺ（「奈良国立文化財研究所三十周年記念学報」第40冊，昭和57年）

注16　中谷雅治・上原和人・大槻真純「恭仁宮跡昭和53年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』，京都府教育委員会，昭和54年）

注17　鷹野一太郎「三山木廃寺」（『田辺町遺跡分布調査概報』，田辺町教育委員会，昭和57年）

注18　近藤義行・梶本敏三・鷹野一太郎「久津川遺跡群発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集，城陽市教育委員会，昭和56年）

注19　梅原末治「井手寺址」（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第４冊，京都府教育委員会，大正12年）

注20　木村捷三郎氏御教示。

注21　平良泰久・奥村清一郎・伊野近富他「平安京（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』第３分冊，京都府教育委員会，昭和55年）

注22　奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』（「奈良国立文化財研究所学報」第九冊，昭和35年）